

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.34

発行 1998.3.31

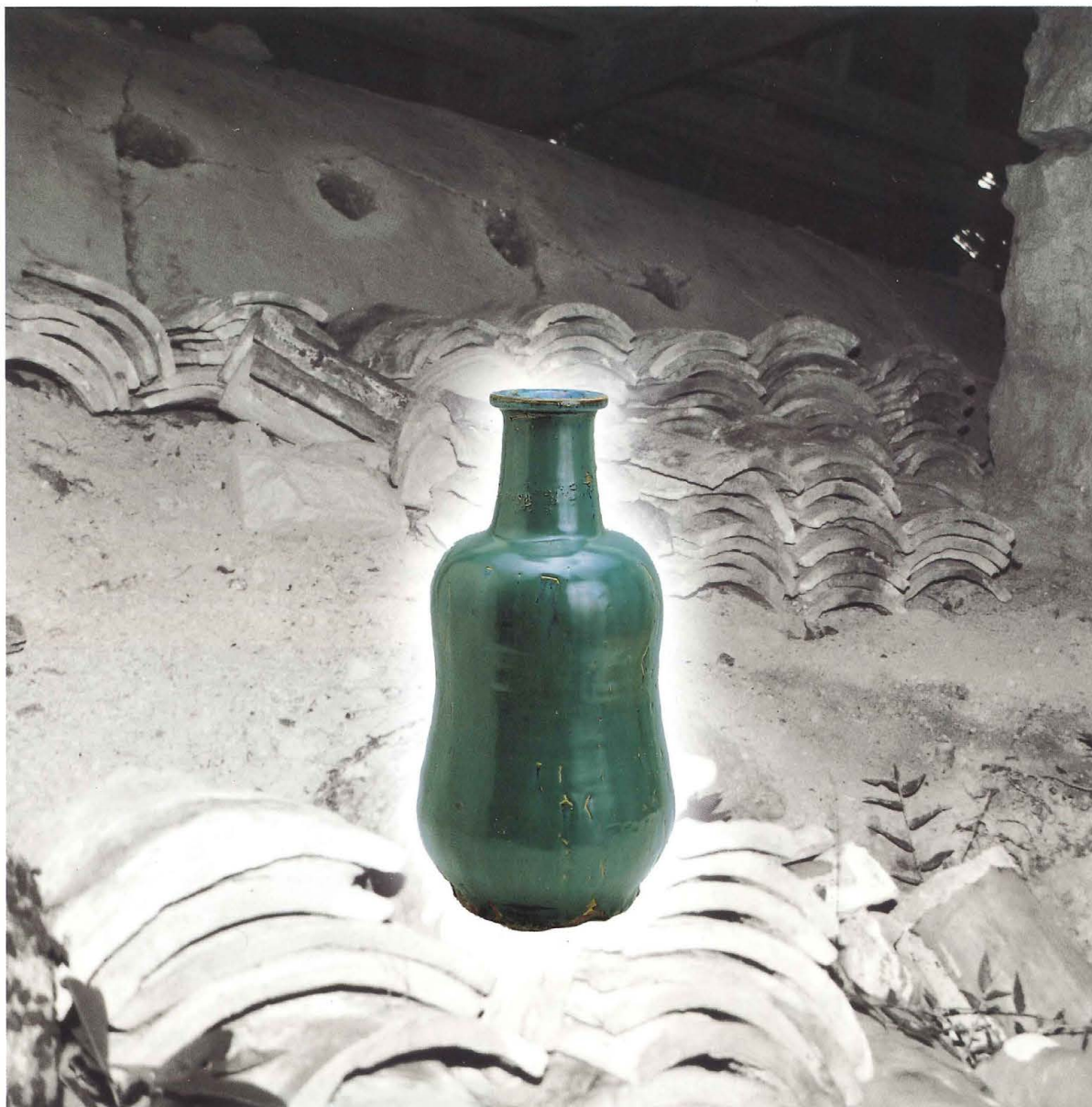
編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 樋渡 昭 範

佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100-1

〒844-8585 TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

印刷所 山口印刷株式会社・伊万里市



りょくゆうゆしびん
緑釉嘉瓶 館蔵資料

琉球・壺屋窯（沖縄県）

19世紀前半

口径9.4cm

高台径15.3cm

高さ42.0cm

最大径21.5cm

嘉瓶とは、沖縄で祝い事の時に相手方に祝儀用の酒（泡盛）を贈るために使われた酒器である。中身の酒は別容器に移され、嘉瓶は贈り主に返される。器形は、ゆるやかに膨らんだ肩部や胴部に太い口頸部がつく特有の形態で、瓢形から変化した形と考えられる。

この作品もその一つで、壺屋で多用された白化粧という技法の上に銅緑釉を厚く掛けた、嘉瓶の典型作品である。

寄贈記念展

「柴田コレクション」展

パートⅥ

— 江戸の技術と装飾技法 —

○趣 旨 平成二年に始まる柴田明彦・祐子夫妻の寄贈による柴田コレクションは、江戸時代の有田磁器を体系的にまとめた質の高いコレクションとして知られております。さらなる内容充実のため寄贈はその後にも継続され、今日まで五回におよぶ展覧会を開催して寄贈品の紹介をしております。このたびは新たな寄贈品により、江戸時代の有田焼の制作技術と装飾技法をテーマとした展覧会を開きます。

17世紀初頭に有田焼が創始されてから制作技術は飛躍的に発展し、短期間の内に当時世界最高峰の技術を誇った中国の窯業技術と肩を並べるほどになりました。また17世紀を中心に様々な装飾技法が発達し、変化に富んだ製品が作られます。こうした有田焼の江戸時代の技術的及び装飾的技法の発展を明らかにするため、柴田夫妻によって新たに集められた作品をパートⅥとして紹介いたします。

○主 催 佐賀県立九州陶磁文化館

○会 場 佐賀県立九州陶磁文化館

○会 期 平成10年7月28日(火)～9月6日(日)

○展示内容 江戸時代の有田磁器504件を技術的な観点から区分して展示します。展示コーナーは以下の7つからなり、このコーナーをさらに細分して81種類の技法を紹介します。

○展示構成 1 成形 2 下絵付 3 施釉・窯詰
4 上絵付 5 同一器形の意匠
6 構図の技法 7 異素材加飾



色絵鳳凰唐草文香合 1660～80年代
〔「成形」のコーナーで紹介〕



錆絵菊花文台皿 1630～40年代
〔「下絵付」のコーナーで紹介〕



青磁染付樹鳥文葉形三足皿 1660～80年代
〔「施釉・窯詰」のコーナーで紹介〕



色絵菊鳥文輪花皿 1650～60年代
〔「上絵付」のコーナーで紹介〕

特別企画展のお知らせ

「沖縄のやきもの」

— 南海からの香り —

○趣 旨 当館は、これまで九州各県の陶磁文化を紹介するための企画展を昭和63年（1988）には「長崎の陶磁展」、平成4年（1992）には「福岡の陶磁展」として開催してきました。

これらの展覧会は、地域の特色ある陶磁文化を体系的に紹介する展覧会として、学術的に高く評価されています。今回は、その第3回目として「沖縄のやきもの」展を開催いたします。

17世紀に始まる沖縄のやきものは、沖縄特有の文化と風俗にはぐくまれながら特色ある発展をみてきました。韓国陶磁器の流れをくむ鹿児島島のやきものの影響や、中国のやきものの影響を受けながらも、沖縄独自の魅力あるやきものが生み出されています。

このような地域の暮らしに根付いた陶磁文化を紹介します。

○主 催 佐賀県立九州陶磁文化館

○会 場 佐賀県立九州陶磁文化館

○会 期 平成10年9月11日(金)～10月25日(日)

○展示内容 沖縄県各地の陶磁器の紹介、あらやち荒焼、じょうやち上焼、じーしーみ厨子甕、ゆしびん嘉瓶、まかい碗など約250点。また、やきものに関する民謡なども紹介。



色絵家紋文碗

19世紀前半

(壺屋)



染付竹文竹形花生

18世紀～19世紀前半(壺屋)



バナリ鉢

16世紀～19世紀(八重山)

調査ノート

パナリ焼に関する民謡について



パナリ焼は沖縄県八重山郡竹富町^{ヤエヤマ}の新城島^{アラグスク}で1857年（尚泰10）ごろまで造られていた土器質の焼物。新城島をパナリと呼ぶところからこの名称がある。パナリ焼は稚拙でもろく、特別に意匠をこらしたり、装飾文様を施すなどはまれであり、ほとんどが無文である。それだけにフォルムは豊かで逞しく素朴な美しさをもつ。

パナリ焼に関する民謡・古謡として＜仲筋ぬヌベマ＞＜パナリ焼アヨウ＞が竹富島に、＜パナリチイチアーミユンタ＞が黒島に伝えられている。

「竹富島誌」 歌謡・芸能篇（上勢頭 亨 著・1979年11月10日・（財）法制大学出版局発行）のP22～P23に『ぱなり焼あゆー』が紹介されている。

『ぱなり焼あゆー（新見船の曲）』（訳）

「日三日干し晒し／日五日干し晒し／赤土をこなし／白土をこなし／土鍋を作り／泥鍋を作り／枯れ茅^{ヌフアビ}で微温火して／枯れ薄で焼きつけて」

「八重山民謡誌」（喜舎場永珣 著・1967年6月10日・沖縄タイムス社発行）のP226～P231に『仲筋ヌベマ節（竹富）』が紹介されている。

『仲筋ヌベマ節（竹富）』（訳）

「竹富島仲筋のヌベマ女は／同村（幸本家）の乙女であった／一人子の箱入り娘であった／一人子の掌中の珠であった／新城島の役人の賄女にやり／遠島の役人へ嫁がせたのです／どんなわけでヌベマをやったのか／如何なる理由で嫁がせたのか／赤甕を貰ったわけで／白い芋麻の欲しさに／母親は水浴みにかこつけて／赤い水甕を頭に乗つけて／ンブフリイの石丘に登って／盛丘の頂上に登って／可愛い女の子を見ようとして／掌中の珠の子を捕らえようと思つて／朝風、夕風の頃／一人っ子のヌベマを待った

けれど／海を隔てて遠いので／涙が先きにたつて見えなかった」

この悲哀な民謡の生まれた由来は、喜舎場永珣氏によれば次のようである。

「当時、竹富村の与人^{ユンチュ}（村長）に玉得と称する御役人が任命されてきた。きてみると、村番所（村の役所）には水甕も少なく不便をかこち、不満であった。

また他に人頭税時代である当時の御用布の原料にも、良き品種がなく、いつぞや、各戸には良種の芋麻を植えさせて、色艶のよい上品なる御用布を国王へ献納したいと考えたのである。ところが世評によれば、良き芋麻の種は、新城島にあるとの事を聞き、早速、玉得与人はその交渉のため新城島に出張されたのであった。そして、当時新城島の新垣与人（村長）に面会し、来島の目的のしかじかを説明し、貴島にある良い品種の芋麻の苗の分譲と、貴島特産の新城焼^{パナリヤ}の赤甕とを譲ってほしいと具請したところ、新垣与人は心よく承諾したのであった。ところが今度は逆に、新城島の新垣与人はこの竹富与人の玉得に、私にも一つ希望があるが、かなえてほしいとの事である。それは御承知の通り、この新城には芋麻や新城焼はあるが、美しい賄女らしい賄女が得られない。竹富島には器量のすぐれた美人が多いと聞いている。是非とも一人を世話して下さいと嘆願したのである。玉得与人は喜んで竹富島に帰り、村の責任者の役者達にこの難問題の賄女の物色を命じ、その交渉にとりかかったのである。ところが女性の方では、同じ竹富島の役人になら希望する女性も多いが、何しろ海を渡って新城島へ親兄弟と別れてまで行くという事には、そう容易な事ではなかったし、役者達の賄女物色の仕事も、思うにまかせずはかどらなかった。そうする中に、今度は新城島の新垣村長からは、矢のような催促と約束の厳守を要求してきたのであった。もし万一にも、不可能なら、赤甕と芋麻を全部返還するようにとの強硬な催促状が届いてしまった。玉得与人はこまりはて村の責任者を急いで集合させ、スムーズに行かぬこの賄女の問題を村番所奉公に勤めている幸本^{コウモト}山戸の一人っ子の「ヌベマ美人」に白羽の矢をたて、役人の絶対的的命令として決定してしまったのである。封建時代の慣習上、上役人の命令は下庶民にとっては絶対服従の事であったので、自分の掌中の珠にも等しい、いとし娘ヌベマを新城島の与人役人の賄女とせねばならなくなつたのである。この親子の抱き合つて泣き崩れる惜別の哀情を見た竹富の玉得役人は、胸も張り裂けんばかりに、自分の一人娘を新城島にやったよう

な感情となって、いとしいヌベマに抱きつき、「許してくれ、ヌベマよ、私がお前を新城島へやったのだ。いとしき貴女は、竹富島の犠牲者である。国王へ上納する御用布のための人柱になったのだぞ」と泣いて玉得与人は万感こもこも胸中を^{ホトバシ}進り即興詩となって、涙と共に謡い出されたものであると伝承されている。ところが、玉得与人の次に拜命をうけて赴任された与人役がこのヌベマ女の悲哀な話を聞いて大そうに同情し、ヌベマ女の犠牲的精神にいたく感激され、わざわざ沖縄へ「銘入れの琉球焼きの水甕」を注文し、ヌベマの生家たる幸本家に寄贈したのである。神行事に限ってこの水甕に水を入れ使用するようにとの条件を附して与えられたとの事であり、今なおこの水甕は幸本家に家宝として保存されている。その銘には「越本之内／雍正十二年甲寅四月朔日／平良長年新城^{ニヤ}仁也／喜物」と記されている。この銘文の「越本」は「幸本」のことで、雍正12年は享保19年(1734)にあたる。平良長年とあるのは新任の与人役で、新城^{ニヤ}仁也の「仁也」は初めての役人のこと、仮筆者や筆者等の職名であり、新城はその姓である。「喜物」は新任の平良与人がヌベマ女に感動同情して贈った、いわゆる現代の「記念品」の意のように考えられる」

「八重山古謡（下）」（喜舎場永珣 著・1970年8月25日・沖縄タイムス社発行）のP275～P282に『パナリチチヤーミユンタ（黒島）』が紹介されている。

『パナリチチヤーミユンタ（黒島）』（訳）

「新城島の／若者たちが／下地島の／乙女たちが／早朝に／起床して／朝まだきに／元気で起き／^{サル}箆の緒をば／^{ヒジ}脇にぬいて／^{オオサル}大箆をば／取り持って／金串をば／握り持ち／いつも持ち歩く金具類をも／取り持って／前方の小高い丘に／登り行き／高段に／走り登って／赤い粘土を／掘り出し／粘り土をば／突き出して／自家に運んで／早足できた／自分の家へ持ち／とんできた／前泊の／白砂と／内泊（浜）の／砂とを／掻き^{カタツムリ}雑せて／^{カタツムリ}蝸牛の肉の粘液などと混ぜ揉み／踏み^コ捏ね／潤おして／土鍋を／つくり／厚い鍋をば／美しく造り／一週間ほど／日晒らして／数夜ほど／微温火で焼き／新城島の前の浜に／持ち下ろして／その親泊の海岸に／運搬して／自分の船に／積み込んで／その船に／積み込んで／最初に黒島に／碇泊し／真初めに／航海し／黒島西方の保慶部落の泊に／碇泊し／前泊に／廻船して／土鍋をば／島に下ろし／厚い鍋をば／陸地へ引き上げ／家毎を／歩き巡り／各戸をば残らず／歩き廻って／新

^{ナリ}城焼きの土鍋を／買って下さい／厚鍋の焼き物をば／望んで頂戴と／小豆と／交換して下さい／大豆とも／交換して下さいと言っている」

また喜舎場永珣氏はこの『パナリチチヤーミユンタ（黒島）』の（註）で次のように解説をしている。「パナリは島が二つに離れているから島名は「離^{ハナ}リ」と称していた。ある時代に下地島にアロウス^{アロウス}村が創立されていたので、当時の役人がアロウス^{アロウス}を新城村に改正し、公用の便に当字したのが現時の新城島である。上地^{カミジ}と下地^{シモジ}の二島からなっている。周囲も二島合わせて10.145キロ、面積も3.856 平方キロで人口も 114人(1966)。石垣を去る40.74 キロにあるサンゴ島嶼である。いまでは大原（西表島）に大多数は移転してる。……」

この名産のパナリ焼の由来について古老の伝承によると、往古、中国人が離島に漂着し島の女を娶って永住したという。この中国人は中国の陶工師であったようで、陶製技術に秀れていた。村に計って焼物をしたいと申し出たので、村民も大いに喜び共に協力してやったが、粘土が粗悪で中国のような陶器は望めなかった。そこで中国人は工夫をこらして粘土を捏ねたが粘着力が足りないので、陶工師は「根無し蔓^{カズラ}」や「タブの木」の粘液と蝸牛や貝肉等の粘液で捏ねた上にその焼物の内外に粘液を以って塗りつけ、茅や^{ススキ}薄のトロ火で焼いたとのことを語っておられた。その焼物の種類も種々あったが、中でも鍋・釜・水甕・^{タライ}盥・洗骨壺・洗骨甕・香炉・花活・産炉等を製産して八重山中に販売しておったのである。今なお貝塚から発掘されている。沖縄中でこの小さな新城島に限って製造されておったのが珍しいのである。明治37年(1904)、人類学の権威・鳥居龍蔵博士が来島、川平・仲間貝塚を発掘されたが、新城焼が多量発掘された。明応9年(1500)頃に川平村の仲間丘を中心として仲間村が繁栄した当時は郡雄割拠時代であったが、仲間村の満慶と称する英雄が仲間丘上に居城して新城焼を使用したと見えて、その破片が多量に発掘された。そのことを学会に発表されたので一躍考古学上の問題となって次々と学者たちによって発掘され今なお古墳中から洗骨甕として出土されている」

（吉永注 竹富町役場による1998.2月末現在の情報では、上地：1.76平方キロ、男4人、女2人、計6人、所帯数4。 下地：1.55平方キロ、男3人、女0人、計3人、所帯数3とのことである）

（吉永陽三）

行事・展覧会報告

第8回 九州近世陶磁学会

平成10年2月21日～22日に、第8回九州陶磁学会が開催されました。同学会は、九州近世陶磁研究会として平成2年12月に第1回がスタートし、第6回には現在の名前に改称しました。第1回より九州陶磁の情報交換および共同研究の場として毎年開催されてきました。

今回の研究テーマは、「江戸前期における九州・山口地方の陶器―窯跡資料を中心とした―」とし、磁器に比較し、その生産と流通の実態解明が遅れている陶器に焦点をあて、沖縄・九州・山口各地及び瀬戸の研究者により、各産地の17世紀代の製品や技術を比較することにより相互の相違・共通点の認識が深めることを目的として開催されました。

まず、2月21日には藤澤良祐氏(財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター)による「近世瀬戸・美濃窯の変遷―窯業技術を中心とした―」と題した記念講演が行われました。藤澤氏の講演は、関西系とともに九州の陶磁器を研究するものにとって避けて通れない瀬戸・美濃の近世窯業について、最新の発掘資料や文献資料を元に窯体構造、窯道具、製品、生産組織の変遷を体系的にまとめられたもので、1時間半の話に会場全体が引き込まれました。



続いて行われた研究発表では、副島邦弘氏(福岡県立美術館)による「福岡県の陶器と制作技術」、福原透氏(八代市立博物館 未来の森ミュージアム)「17世紀の肥後産陶器について―八代焼を中心に―」の2本が行われ、福岡、熊本の調査の現状と課題や、問題提起などが行われました。

2月22日は前日に引き続き、関一之氏(加治木町教育委員会)「江戸前期における鹿児島県の陶器と制作技術」、上野淳弥氏(大分県教育委員会)と王永光洋氏(大分市教育委員会)「大分県の陶器と制作技術―大分

県佐伯市所在『波越焼窯』採集資料について―」、金城亀信氏(沖縄県教育委員会)「沖縄県の江戸前期相当期の陶器と制作技術―湧田古窯跡の発掘調査成果より―」、渡辺一雄氏(梅光女学院大学)「山口県の陶器と制作技術」、船井向洋氏(伊万里市教育委員会)「大山口窯跡について」などの発表が行われました。最後に、大橋康二氏の司会で講演者や各発表者による討論会が行われ、会場も含め活発な質疑応答が行われ、内容が深められました。

また、恒例になった各地の出土陶片を持ち寄った遺物検討会も大橋康二氏の解説を元に、熱心に行われました。

以上の内容で二日間無事進行し、閉会しました。

平成9年度 陶芸文化講座

今年度最後の行事として、平成10年3月28日(土)に陶芸文化講座を開催しました。

従来当講座は、陶磁器の研究者などによる講演会を中心とした内容でしたが、今年度は「名品に触れて鑑賞する―古陶磁の見方―」として、古陶磁や今日の焼物への興味を深めてもらう目的で、九州陶磁文化館の館蔵名品に実際手を触れ、古陶磁鑑賞の仕方を学ぶという初めての試みを行いました。

当日は、あらかじめ抽選で選ばれた県内外20名の受講者の方々が参加されました。最初、古陶磁を手にする際の注意や作品の解説を講師の吉永陽三学芸課長が行い、次に古唐津、初期伊万里様式、初期色絵様式、柿右衛門様式、ヨーロッパ倣製品、古伊万里様式、鍋島様式などの作品13点に手を触れて鑑賞しました。受講者の方々は、いずれも鑑賞態度が熱心で、指導する学芸員につぎつぎに質問を浴びせられ、閉会の予定を1時間も越えてしまうほどでした。

今後とも、受講者のニーズにあった陶芸文化講座の開催を考えていきたいと思います。



「柴田コレクション県内巡回展」

趣 旨

柴田明彦・祐子夫妻は、昭和40年代から収集された江戸時代の有田磁器を、平成2年から平成9年12月まで9回にわたって佐賀県立九州陶磁文化館に寄贈され総数は3,255件・7,571点に及びます。

「柴田コレクション」は、江戸時代の有田磁器の変遷を明らかにする学術的な価値を持つとともに、美術品としても高く評価されています。

このコレクションは、佐賀県立九州陶磁文化館で常設展示されていますが、平成7年度には福岡・佐賀・長崎を巡回し、御好評をいただきました。

このたびの展覧会は、佐賀県内4か所を巡回し、ひとりでも多くの県民の皆様に対して「柴田コレクション」のすばらしさを知ってもらうことを願って展示いたしました。入館者総数は4会場の合計で7,515人を数えました。

主 催

佐賀県立九州陶磁文化館・唐津市近代図書館・佐賀市立図書館・多久市郷土資料館・鳥栖市立図書館

会場と会期

唐津市近代図書館 (1,620人／8日間)

平成10年1月6日(火)～1月14日(水)

佐賀市立図書館 (3,358人／12日間)

平成10年1月20日(火)～2月1日(日)

多久市郷土資料館 (1,223人／14日間)

平成10年2月7日(土)～2月22日(日)

鳥栖市立図書館 (1,310人／11日間)

平成10年2月28日(土)～3月13日(金)

展示品及び展示構成

柴田コレクションの中から厳選した作品 約100点

1 年代ごとのコーナー

(1) 1610～1620年代	2点
(2) 1630～1640年代	2点
(3) 1650～1660年代	2点
(4) 1670～1680年代	2点
(5) 1690～1700年代	2点
(6) 1710～1740年代	2点
(7) 1750～1780年代	2点
(8) 1790～1820年代	2点
(9) 1830～1860年代	2点

2 文様ごとのコーナー

(1) 虎(平成10年の干支)の文様	10点
(2) 十二支の文様	22点
(3) 松竹梅の文様	6点
(4) 人物の文様	6点
(5) 魚の文様	6点
(6) 鳥の文様	6点
(7) 虫の文様	6点

3 用い方を見せるコーナー

(1) 江戸時代の本膳の復元	10点
(2) 現代のテーブル・コーディネート	10点



柴田コレクション県内巡回展・唐津市近代図書館



色絵地詰菊散文菊花形鉢 1690～1710年代



色絵松竹梅窓絵山水文輪花皿 1740～1760年代

シリーズ

やきものの技法 (29)

ゆうやく ようちやく
釉薬による熔着

釉薬はやきものの表面をガラス質のもので覆うことで強度を増し、またやきものに光沢を与えて美しくする。このような釉薬の役目の他に、釉薬によって接着する技法がある。複雑な形態のやきものは、部分を別々に作り、生乾きの時に接合する。この場合の接着材は粘土である。その後乾燥させて素焼きをし、全体に釉薬をかけ焼成する。ところが江戸時代の有田磁器には、釉薬を接着材として用いる技法がある。別々に成形されたものに個別に施釉を行い、窯詰めの際に組み合わせ、焼成後の冷却によって釉薬が硬化し熔着する。これによって成形時には完成していない形態が出来上がる。



染付透彫七宝繫文香炉

有田 1630～40年代 柴田夫妻コレクション

写真の香炉は、透彫^{すかしぼり}のなされた外器に筒形の内器が差し込まれ、釉薬によって熔着したものである。外器と内器の接点は、口部と底部である。これらの部分は、通常見られるような接合部特有の撫跡^{なで}がなく、釉薬のみによって接合されている。七宝文の窓から内部を見ると、内筒に染付で竹文が描かれている。小さな透かしの窓から文様を描くのは不可能であり、筒形の内器を外器にはめ込む前に文様を描いたと考えられる。この香炉は1630～40年代に制作されたものであるため、釉薬による熔着はかなり早い段階から行われていたことが分かる。

17世紀後半においても、数は少ないが釉薬による熔着は引き続いて行われている。筒形で高い高台の台皿に、高台部と皿部を熔着したものがある。施釉後高台部に皿部を乗せただけで焼成したものである。乗せ方が悪いと高台部の中央に皿部がうまく乗らず、中心からずれた熔着となる。(鈴田由紀夫)

シリーズ

やきものにみる文様 (29)

ほう おう
鳳 凰 文 様

鳳凰は麒麟、亀、龍とともに四霊とよばれる想像上の動物で、喜ばしいことがあると出現すると古代中国で考えられていた。とりわけ、徳の高い君子が帝の位につくときには宮廷に鳳凰が飛来するとされ、日本でも西暦650年にだされた詔に、「聖王世にいでて天の下を治(し)らす時に、天すなわち応えて其の祥瑞を示す。所謂(いわゆる)鳳凰・麒麟・白雉・白鳥、かくの如き鳥獣・草木に及び、しるし応えあるは皆これ天地の生ぜるよき祥(さが)よき瑞(みず)なり」とあり、鳳凰は聖王が天下を治める時に現われる瑞鳥としている。

鳳凰は、鶏のように冠をもち、尾が長く、羽毛は五色に彩られ、鶏と孔雀を組み合わせたような姿で表現される。日本には、古墳時代の末には鳳凰の文様が伝えられ以来、さまざまな工芸品にとりいれられている。とくに、鳳凰を円形にあらわす団鳳凰文や、二羽を向かい合わせに配する双鳳凰文などがよく見られる文様である。

鳳凰は、梧桐の木に留り、竹の実を食べ、霊泉を飲むという、聖獣らしい伝説的な生態で語られ、とくに桐と鳳凰の組み合わせは鳳凰にふさわしく、絵画などにも表わされるが、やきものに見られる鳳凰文は他の花木(牡丹や菊など)と適当に組み合わせられたものが多い。また、龍とともに描かれるものが多く、これは中国陶磁の影響と思われる。(永淵友子)



染付桐鳳凰文蓋付壺

有田 1660～70年代 柴田夫妻コレクション

利 用 案 内

開 館	9:00～16:30 月曜休館 年末年始の休館は、12月28～1月1日
観覧料	無料(特別企画展は、その都度定めます。)
交 通	J R九州 佐世保線有田駅下車徒歩約10分